

「ラディカル・ローザ・パークス」

ダニエレ・マクガイヤ
藤永 康政 訳

1965 年春、投票権を求める〈セルマ＝モントゴメリー行進〉のとき、冷たい雨の道を歩く、数百人にのぼる疲労困憊したデモ行進参加者のなかに、ローザ・パークスがいました。しかし、このときに、1955 年から 56 年にかけて闘われたモントゴメリー・バス・ボイコット運動のヒロインが彼女と同一人物であるとわかった人は誰もいませんでした。実際のところ、彼女がいったい誰であるのか知っていた人ですら、ほとんどいなかったのです。それからおよそ 50 年後、高校生を対象に、「大統領以外の人物で歴史に名を残した人物 10 名を挙げよ」という調査が行われました。これでは回答者の3分の2がローザ・パークスの名前を挙げたのです。パークスより知られていた人物はマーティン・ルーサー・キングしかいません。今日の高校生たちにとって、1955 年 12 月 1 日の出来事、すなわちバスのなかで白人男性に席を譲れという命令をローザ・パークスが拒否し、人種隔離制度に抗議したという事件ほど、繰り返し聞かされてきた歴史上の物語はありません。この話は、あまりに広く知られているために、今日のアメリカではある種の神話の一部にさえなっています。それはこのような神話です。一日の長い仕事のあと、落ち着いた威厳のある女性の裁縫職人は、あまりにも足が疲れていたために、バスの後方座席へ移るのを拒否した、このたった一人の勇気ある行動が、事前に計画をめぐらしたわけでもないひとつの自発的なアクションが起爆剤となって、公民権運動は始まったのである。そして、人種隔離制度の壁が崩れ去っていったのだ。

かくして彼女の地位は「公民権運動の母」と呼ばれるまで崇め奉られ、合衆国大統領から「自由勲

章」と、連邦議会から「名誉勲章」を授けられることになりました。彼女の告別式は連邦議会議事堂で行われたのですが、女性としては初、アフリカ系アメリカ人としては二例目であり、そもそもこれは通例大統領経験者のみに与えられた名誉なのです。このようにパークスを物静かだが強い勇気を持った女性として描くことはとても広く行われているものです。ひとりの勇気ある女性の慎ましやかだが正義感溢れる行為がアメリカにその人種主義を恥じ入らせ、本来正しいとされたことを現実としても行うように突き動かした—このようなストーリーは、小さなダヴィデが巨人ゴリアテに勝つことにも似た、寓話的な神話の性格さえ帯び、そのストーリーは、ほとんどすべての教科書、ミュージアムの展示、ポピュラーな歴史物語のなかで繰り返して伝えられることになっています。

出来事をこのように解釈すると、ローザ・パークスは、現実の歴史の外部に存在する創作上の物語のなかで人生を送ったことになり、当時の史的文脈や条件とは無関係になってしまいます。壮年の彼女に備わった威厳は認められても、^{アクティヴィズム}運動の歴史から切断され、ハーブ・コールが述べているように、「知性や道義的信念よりも、衝動と感情に従って行動した」と描写されることになります。ひとりのリーダーとして、そして抑圧に抗して団結した市民たちからなる政治的にアクティブなコミュニティの一員としての彼女の姿をイメージすることができなくなるのです。実際のところ、彼女を称えた記念碑などは、バスに独りで乗る姿を刻んだものばかりであり、それはまるで、世界変革を引き起こすにはじっと動かずにいるだけでいいとでも言っているようです。わたしの考えでは、このローザ・パークス神話は、本質的にイデオロギ

一で粉飾されたものなのです—このような解釈は、歴史のなかに物静かな女性がつま先立ちでひっそりと忍びんでいるかのように見せるものであり、現実の彼女が持ったパワー、彼女のラディカリズム、そしてアクティヴなシティズンシップの概念といったことをかえってわかり難くさせてしまいます。さらに残念なことに、ジェンダー化されセックス化されてしまっている、より大きな歴史的文脈のなかで繰り広げられた、敬意、尊厳、そして高潔な身体を我がものとするための黒人女性の奮闘を見え難くさせ、自由と人間的尊厳を勝ち得るためのアフリカ系アメリカ人の長い闘争の歴史を、信憑性の怪しい陰謀論に矮小化してしまうのです。

ローザ・パークス神話は、エドワード・モーガンの言葉を借りると、「潜在的には今日まで繋がっている正義を求める闘争の歴史」を、それを踏まえればわたしたちにいますぐできることの領域から奪い去り、シティズンシップの観念を大切に暖める闘争や政治的チェンジを求める闘争に制限を課す、一種の修正主義なのです。もしあなたたちが大衆運動が沸き起こるのを、変革が起こるのを妨害をしたいのならば、ローザ・パークスのくたびれた足がジム・クロー制度を崩壊に導いたという筋立てがとっても有効でしょう。このようにローザ・パークスについて語ると、まちがいなく今日の学生たちは目を丸くします。他方、寡黙なローザ・パークスはいったい何を教えるのでしょうか。そんなローザ・パークスがチェンジを求める思いをインスパイアすることはあり得るのでしょうか。

これまでとは違った方法で彼女のことが語られるとするとどうでしょう。ラディカルなローザ・パークスについてもっと人びとが知ったらどうなるのでしょうか。わたしがこの講演で言いたいことは次のようなことです。実際に生きたリアルなローザ・パークスは、神話で描かれる彼女の姿よりずっと興味深い人物であり、一般に知られている偶像化された姿よりもはるかに人びとのパワーの源泉になり得る人物なのです。彼女は、ミリタントで、自らの人種に誇りをもつ女性であり、鋭敏な知性を発揮した調査員であり、反性暴力運動家だったのです。そしてまた、彼女をこのよう

に想起することは、近代公民権運動を、ただ単に南部の人種差別に対する抗議運動としてではなく、アメリカ全体の変革を求めたナショナルな闘争として理解することに資するでしょう。

ミリタントなレイス・ウーマン

1944年のアラバマ州アベヴィル、レシー・テイラーという名前のアフリカ系アメリカ人の女性が、教会のリヴァイヴァル・ミーティングから家に歩いて帰っていました。車に乗った白人男性の団はその彼女を森のなかへと拉致し、銃口を突きつけて集団で強姦したのです。その後、街の真ん中で彼女を車から降ろすと、事件のことを誰かに告げたら、殺す、と脅しました。しかし、その夜、彼女は、彼女の父親と夫、そして地元の保安官に、この残忍な暴行のことを伝えました。数日後、黒人の公民権団体、全国黒人向上協会(NAACP)からテイラーのもとに電話が入りました。最高の腕をもった調査員を派遣する、と言うのです。その調査員の名前が、ローザ・パークスでした。

1944年にテイラーと会ったときのローザ・パークスは、NAACP モントゴメリー支部でまだたったの一年しか活動していません。しかし、このときすでに、彼女は熟練した運動家だったのです。静かな物腰の人物でしたが、その静けさの奥には、子供の頃の彼女の生活に根を張っていた白人至上主義と闘うという、鋼のような決意を隠し持っていました。彼女には、まだ小学生の頃、祖父を通じて、ジャマイカ生まれのブラック・ナショナリスト、マーカス・ガーヴィの激しいアジ演説を聞いたことがありました。そうして黒人の歴史とその人種に誇りを持つことを学んでいったのです。彼女は、アラバマ州パイン・レヴェルの街に住んでいた祖父のことを特に誇りに思っていました。祖父は日常的に繰り返されるクー・クラックス・クランのテロ攻撃から、必要に迫られるならば暴力を行使して見え、自分自身と家族の安全を守る強い意思を持っており、そのことを特に誇りに思っていたのです。彼女はこんなことも言っています。「何が見たかったって、わたしはおじいさんがあの銃をぶっ放す

ところを見るのが楽しみでした」。10歳の頃のローザ・パークスは、ガーヴィ主義者の祖父に似て、大胆不敵なところがありました。近所では有名だった白人のいじめっ子とこんなやりとりを交わしたことがあるそうです。「フランクリンがわたしを殴ると脅すものだから、レンガの塊を握ってこう言ってやりました、やるならやってみなさい」。祖母はこのことでローザを叱りつけましたが、それでも、「できることならば、自分の身は自分で守ること、そしてその権利は行使すること」については祖母も彼女の味方でした。彼女は後にこう述べています。「誇り高きアフリカン・アメリカンならば、相手が誰であっても、ひどい扱いを甘受してはならない、この信念はわたしの遺伝子のなかに組み込まれたようなものなのです」。

祖父の膝の上で学んだ、このような教訓は、1931年に白人家庭のメイドとして働いていたときに役立つこととなります。仕事が終わったある日の午後、ひとりの白人男性が家のなかに入ってきて、セックスを求めてきました。そのときのことを彼女はこう述べています。「彼はわたしにぐっと近づいてくると、腰に手を回してきました。とても恐ろしくて、死にそうなくらいでした」。彼女が憤激することになるのは、その男性—この暴行について述べているエッセイで彼女は「チャーリー」と呼んでいます—がセックスの代償に金をやると言ってきたときです。「わたしはこのときもはや誇りを持ったティーンの子ではなく、肉体を持った便器、交渉次第でどうでもなり、商品のように小分けして売り出される売春婦として扱われたのです」。彼女はまた、「奴隷制の時代、汚い混血児が生まれてしまうようなことをするために飼育されていた」曾祖母の話を出したと述べています。「彼女は、ニグロの奴隷と白人の主人の双方から虐待を受けたのです」。パークスは、同じことが自分の身に起きるのを許したりはしませんでした。パークスは挑撥的にこう述べています。「何が起きたって、白人男性の野獣性に屈服したりはしない、そう思っていました。死んだって構わないから、思い通りにさせることだけは、ぜったいに、ぜったいにさせはしない。わたしを殺し、死体をレイプしたいのならば、そうす

れば良い、だとすれば、まず最初にしなくちゃならないのは、わたしを殺すことですね」。

ローザ・パークスは、このような悲痛な経験があったからこそ、正義を求める運動の闘士になったのかもしれない。というのも、このことがあったのと同じ年、彼女は、ほかの黒人活動家たちとともに、スコッツボロ・ボーイズ支援資金を募る秘密集会に参加しているからです—スコッツボロ・ボーイズとは、アラバマ州スコッツボロで、貨車のなかで2人の白人女性に暴行を加えたとして冤罪に問われた9人の黒人男性のことです。このときにパークスら活動家たちは、テーブルの上に銃を積み重ねて、アラバマの処刑電機椅子からこの男性たちを救い出す計画を練り、幾度となく会合を持ったとされています。

1940年代、スコッツボロ・ボーイズの裁判が上級審へと進んでいくあいだも、ローザとその夫、レイモンドは、〈投票者連盟〉の集会を主催し、モントゴメリーの友人たちに有権者登録を行うことを薦めていました。これはその当時ではとても危険なことだったのです。これらの秘密集会は、スコッツボロ救済集会と並んで、パークスにとって、大恐慌の暗澹たる時代に人種の正義のために活動をしていた黒人運動家の地下ネットワークへの入り口となっていきます。このサポート・ネットワークは、彼女が、当時最大の黒人労働者の組合、寝台車ポーター友愛会組合の秘書を務めたときに、そして1943年にNAACPモントゴメリー支部の秘書になったときに、とても重要な役割を果たすことになるのです。

ところで、「秘書」という慎ましやかな肩書きは、彼女の仕事の実際の重要性を誤って伝えています。彼女が行った仕事は、集会の議事録をとったり、書類をファイルしたりということではなかったのです。職務を遂行している大半の時間は、残虐行為や未解決の殺人事件、投票者に対する脅迫行為などの人種差別が関係の事件を調査し記録にとどめるために、アラバマの埃だらけの田舎道を旅することで費やされていたのです。人種平等に対する信念があったこと、そして自分の能力に対して生来の自信があったことで、ローザは、取り扱いに注意が必要な

情報や、危険な情報などでも信頼して預けることができる人物だと見なされていたのです。「ローザが話を聞いてくれるよ」、人びとはこう言って人種偏見が原因の暴力の犠牲者たちに声をかけていました。そして、スコッツボロ事件と自分自身に対する暴行によって政治意識を高め、それらから強く影響を受けていたために、パークスが特に強い関心を示していたのがレイプ事件だったのです。

ノートとペンを携えたローザ・パークスがアラバマ州アベヴィルのレシー・テイラーの家の玄関に現れたのは 1944 年秋のことでした。そして、強姦について綿密な証言録をとると、それをモントゴメリーへと持ち帰り、〈ミセス・レシー・テイラーのために法の平等な裁きを求める委員会〉を結成したのです。委員会は大衆集会を企画し、近隣を戸別訪問して署名を集め、全米各地の州知事や司法長官への投書運動や誓願活動を行いました。この全国規模の抗議運動は、シカゴ・ディフェンダー紙が「この 10 年のあいだで最も強力な法の下での正義を要求する運動」と形容したほどです。同紙はこの運動をスコッツボロ事件に類比していましたが、これこそローザ・パークス自身も深く関与したものにほかなりません。11 年後、このモントゴメリーで育った運動家たちは、〈モントゴメリー改善協会〉を結成し、その初代会長にマーティン・ルーサー・キング牧師を迎えて、最終的には世界を変えることになる運動を開始し、世界に名を轟かせることとなります。しかし、この協会の母体になる政治連合が生まれたとき、キング牧師はまだティーンエイジャーでしかなかったのです。

モントゴメリー・バス・ボイコット運動は、公民権運動の開始を告げる事件として有名です。しかし、その運動は、人種的・性的な暴力から、アフリカン・アメリカンの男女を保護し守り抜こうとする何十年もの闘争を礎に形成されたものだったのです。実のところ、ローザ・パークスは、モントゴメリー市のバスにおける人種隔離の問題に関心を移す以前、1940 年代後半から 1950 年代初頭にかけて、これと同様のさまざまな事件を通じて政治経験を積んでいました。そして、人種隔離されたバスこそ、黒人女性が暴力事

件に巻き込まれる危険度の高い場所の最たるものだったのです。

当時のバス運転手には警察権がありました。彼らは、警棒と銃を携帯し、ジム・クロウ制度下の人種の秩序に従おうとしない黒人に暴行を加え、時には殺害することもあったのです。1953 年だけで、暴行や虐待を理由としてアフリカン・アメリカンが告訴に踏み切ったケースは 30 件以上にのぼっていました。そのうちの大半は家政婦など労働者階級の黒人女性からのものであり、同市のバスの乗客の 80% は彼女たちで構成されていたのです。それらの訴状には、運転手たちが、淫らなセクハラ発言を繰り返し、痴漢行為を行い、肉体的虐待を加えていたということが記されています。そのなかである女性は、ストリートの角でバスを待っていたときに受けた性的ハラスメントの模様をこのように述べています。「通りから見てバスの床面は少し上のところ、バスのなかからだと通りに立っている人は下に見えます。ストリートの角に立ってバスが近づいているのを見ていると、その中の人びとが陰部をさらけ出し、見せつけてきたのです。それは死ぬほど恐ろしいことでした」。また別の訴状はこのように述べています。バス運転手は「黒人女性をできる限り乱暴に扱おうとします、まるでわたしたちが動物か何かのように」。

1954 年、ジョアン・ロビンソンをリーダーとする戦闘的な組織、〈女性政治評議会〉は、「侮辱や屈辱を回避するために」黒人女性はバスのボイコットに入る意を固めていると、モントゴメリー市長に告げました。ロビンソンによると、女性たちのなかには、すでに自発的にボイコットを開始していた人もいました。そして、1955 年 12 月 1 日にローザ・パークスが警察に逮捕されたのを契機として、ジョアン・ロビンソンと女性政治評議会は、ボイコットを呼びかける公式声明をついに発することになりました。その夜、ジョアン・ロビンソンと彼女の助手 2 名は、黒人の女性性を守るためにバスの日ボイコットを呼びかける 5 万枚ものビラを作成しました。それはこう訴えています。

今度もまたニグロの女性が逮捕され、監獄に入れられました。白人が座れるように座席から立ち上がれという命令に拒否したのが原因です。このようなことは何としてでも止めさせなくてはなりません。このような逮捕をストップさせないならば、同じことは今後も続くでしょう。そうすると次に逮捕されるのはあなたかもしれません、あなたの娘さんやお母さんかもしれないのです。

12月1日の早朝、女性の一団が、学校や商店の店先、美容院、バー、理髪店やオフィスなど、人の集まる場所にそのビラを届けました。そして、正午にもなると、あらゆる人がボイコットの計画を知るようになったのです。一般に流布しているアメリカの歴史物語では、ローザ・パークス逮捕が、ボイコットの引き金を引いたということになっています。人びとは、疲れ果てた年配の女性労働者が受けた扱いが不当であることに激しい憤りを感じ、バスに乗らず歩くことを選んだ、となっています。しかし、彼女はそもそもそんなに年をとっていたわけでもなければ、疲労困憊していたというわけでもありません。そして、彼女の逮捕があろうとなかろうと、史料が示すところによると、事態は明らかにボイコット開始へと向かっていたのです。何よりも、パークス自身がそう認めています。1956年4月に彼女はこう述べています。「女性たちが歩くことを選んだのはわたしを支持していたからではありません。不当な扱いを受け、侮辱を受けていたのがわたしだけではなかったからそうしたのです。わたしと同様の経験をした人は多くいますし、さらに多くの人がもっと屈辱的な目に遭っていたのです」。

足が疲れていたからパークスが人種隔離への抗議のために立ち上がったという話の問題は別として、今日ではこれとは違う説もあります。それは、パークスはとても狡猾な人物であり、すべてのことを事前に計画していたというものです。ローザ・パークスの経歴について何らかの知識があれば、後者のシナリオの信憑性は低いと断言することはできないでしょう。

歴史家の J・ミルズ・ソントンが主張しているように、彼女は、「これまで思われていたよりずっと深く人種差別に抗する運動に関係を持っていた人物であり、その街の4万5000人の黒人市民のなかでは、差別撲滅のための運動については深い知識を持っていた人物の方に入る」のです。また彼女は、NAACP支部長の E・D・ニクソンが、黒人と白人双方からシンパシーを得ることができる、リスペクタブルな原告を探していることを知っていましたし、コミュニティにおける自分自身の地位を考えると、ニクソン支部長が自分のサポートに回ってくれる確信もあったのです。

しかし、結局のところ、彼女がバス・ボイコットの計画を練っていたということはありません。事前の計画を立証する史料が存在していません。わたしが思うに、ローザ・パークスは、バスのなかで抵抗する機会に出会い、その機会との出会いをしっかりと握りしめたのです。あの運命の日に、自分の座席で動かずにじっとするという彼女の決断、それはラディカルな活動家としての彼女の経歴のなかに、そして不正義を目撃してきた長年の経験のなかにルーツがあるものでした。彼女はガーヴィ運動のなかで育ちました。結婚して間もない頃、彼女とその夫はスコッツボロ闘争に加わりました。1944年のレシー・テイラー強姦事件では、彼女の調査活動があつて、全国規模の運動が始まったのです。NAACP や寝台車ポーター友愛会組合などの団体で彼女が活動を始め、モントゴメリー市の黒人の自由のための闘争の中心に位置し始めてから、すでに数十年が経過していました。そして、これらすべてのことは白人が彼女をバスの後方座席に追いやりようとしたときよりも遙か以前から始まっていたことだったのです。したがって、1955年12月1日に彼女が自分の席に留まり続けようと決意したことは、神秘的なものではなく、やっとな訪れたチャンスだったのです。彼女はこう言っています。「何事にも終着点がなくはありません。そしてあのときわたしはそこが小突かれ回されることが終わる場所に思えたのです。アラバマ州モントゴメリーであつてでさえ、わたしには人

間として、そして市民として保証されたあらゆる権利がある、それを今後きっぱり、はっきりと胸に留めなくてはならないときは今だと決意したのです」。

しかし、あの日のあと、活動家としての、そして恐れ知らずのレイス・ウーマンとしてのローザ・パークスの経歴は、人びとの視界から消え去ることになります。その代わりに、彼女が象徴したものは、黒人女性の徳の高い女性性でした。静かな威厳と、きちんとした身だしなみ、そしてミドルクラスならば備えていなくてはならないとされる礼節、これらを持っているがゆえに祝福され、「^{ウーマンフット}モントゴメリーの聖母^{マドンナ}」として聖人化されていったのです。

人びとが彼女を偶像として崇拜される存在にまで高める—たとえば、疲れた足の神話を創りだす—のを横目に、彼女は相も変わらず不正義に対する闘いを続けていきました。一年間も続いたボイコットのあいだ、彼女は電話番を務め、ボイコット維持のために不可欠であった乗り合い自家用車システムの運行を調整し、運動の維持のために全国中をまわって無数の講演を行いました。人種的偏見に満ちあふれた手紙や脅迫を毎日受けていたのにも関わらず、そうしていたのです。しかし、1957 年になると、モントゴメリーの状況はきわめて厳しいものになってしまい、彼女はデトロイトへ移住せざるを得なくなっていました。デトロイトとは、「北部にある約束の地と呼ばれていたが、それは風評だけのものだった」と、その後彼女が酷評することになる場所です。

広く知られているアメリカ史のなかのローザ・パークスは、モントゴメリーの市バスの席からほとんど動きだそうとしませんし、彼女の人種隔離制度に対する大胆な反抗は、完全に南部特有の物語になってしまっています。ところが、この後の 40 年のあいだ、彼女の運動の場となったのは、北部ミシガン州のデトロイトだったのです。そこで彼女は、人種隔離、警官暴力、雇用、住宅、教育における差別と闘い、「人種的不平等は、南部に特有の現象などではない」ということを伝え続けたのです。

デトロイトでのパークスは、まず、住まいを探し、職を得るのに苦勞しました。人種隔離された空間を示

す露骨な標識こそなかったのですが、デトロイトでも、黒人だけの住宅地の外で住まいを探すことはほとんど不可能でした。白人たちは環境の良い郊外に移り住んでいたのですが、肌の色の違いによる境界^{カラー}線を越えて郊外に移り住もうという試みは、白人からは敵意で迎えられ、時には暴力的な抵抗に遭ったのです。デトロイト都市圏では公開住宅法を^{オープン・ハウジング}求めるデモ行進が行われていたのですが、ローザ・パークスはしばしばそのようなデモの先頭に立ちました。たとえば、デトロイトで開催された巨大なデモ行進、「自由への行進」で、マーティン・ルーサー・キングが先頭に立った一カ月後の 1963 年 7 月 23 日、白人だけが住むデトロイト郊外の街、オーク・パークへ、住宅差別に抗議する 200 人のデモ隊を率いていったのはローザ・パークスでした。

多くの白人たちは、彼女がオープン・ハウジング運動に参加したことを好意的に受け取りませんでした。マーティン・ルーサー・キング牧師に心酔していた白人リベラルたちでさえ、ローザ・パークス、つまり「公民権運動の母」の行動は快く思わなかったのです。その結果、デトロイトでは職に就くことにも苦勞し、「南部へ帰れ」と記された嫌がらせの手紙を受け続けることになったのです。にもかかわらず、パークスは、公民権運動の集会に参加し、デモの先頭に立ち続けました。1964 年、彼女は、ジョン・コニャズ連邦下院議員の「仕事、正義、平和」を求めるキャンペーンにボランティアとして参加し、その後の彼の秘書の職を得ることができました。政策に関わる仕事で俸給を得ることになったのはこれが初めてであり、その後 1988 年に退職するまで務めることになります。しかし、またここでも、彼女の肩書きは、コニャズ議員のために彼女が実際に行ったことを誤って伝えていきます。日常業務のほとんどを差配するだけでなく、政治集会に出るコニャズに情報を伝え、学校、病院、介護施設を訪問して議員の耳目の役割を果たし、議員がコミュニティのニーズや活動に関してしっかりと知識が持てるようにしていたのは彼女なのです。

コニャズ議員のための活動以外では、彼女自身の

コミュニティや全米の黒人コミュニティの政治的経済的エンパワメントを追求する活動の支援を行っていました。歴史家のジャン・シオハリスによると、彼女は近隣の自治組織のリーダーを長く務め、地域の経済振興を促進し、青年のための就業機会を拡大する方策を探し続けました。たとえば、1967年のデトロイト大叛乱の後、その暴動の始まりとなった場所に建設されたバージニア・パーク・コミュニティ・プラザというショッピングセンターの開発事業の支援を行いました。この開発計画が完成すると、当時のアメリカでは、黒人が所有権をもつ唯一のショッピングセンターになったものです。

今日の人びとの記憶のなかにあるパークス像では、彼女は二つの人種を取り結ぶ関係を築くために献身的に行動したと見なされていますが、実際のところ、彼女はブラック・パワー運動の熱心な支持者でもありました。たとえば、彼女が尊敬していた人のなかにはマルコム X がいますし、ノース・カロライナ州で黒人に武装自衛を訴えた戦闘的な活動家ロバート・F・ウィリアムズを高く評価していて、1996年に彼が亡くなったときには、告別式で弔辞を述べることとなります。1960年代後半から1970年代前半にかけて、黒人だけの政党であるフリーダム・ナウ党の会合にも頻りに現れて支援演説を行い、アミリ・バラカ、チャールズ・ディグス、リチャード・ハッチャーの呼びかけで開催された1972年ゲアリー・ブラック・パワー大会では、黒人独立政治綱領の立案に加わったりもしました。

1975年には、1944年のレシー・テイラー事件での彼女の活躍とよく似ている活動を開始します。(ジョアン・リトル弁護委員会)のデトロイト支部創設を支援したのです。ジョアン・リトルは、1974年にノース・カロライナ州で起きた保安官殺害事件で当時服役中だった黒人女性です—彼女は獄に収監されているときに白人の保安官から性的暴行を受けそうになり、保安官殺害は自分の身を守るためだったと主張していたのです。性的暴力から自らの身体を守る権利が黒人女性にだってある、そう主張することで、パークスらを中心とするリトル支援運動は、深南部

の奴隷制にルーツを持つ、白人男性による黒人女性に対する体制ぐるみの虐待行為に終止符を打ったのです。

今日、ローザ・パークスが、レシー・テイラー事件の調査のためにアラバマ州アベヴィルの街に向かってから、約70年が経過しています。1944年に彼女が始めた全米規模の、そして国際規模の運動は、人種に基づく残忍なカースト・システムの問題の核心に人びとの注目を集めさせ、その後の近代公民権運動に必要な「インフラ」を整備してきました。そしてこの公民権運動を、パークスは、南部だけでなく、北部でもリードし続けたのです。

ところがしかし、ほとんどの歴史の本は、この運動のこと、つまり、ラディカルな運動家としてのローザ・パークス—生涯すべての時間を人間の尊厳と自由の権利のために捧げた、ラディカルな活動家—の長い経歴のことを何も語っていません。ローザ・パークス自身、自分がある種のシンボルになっていることを分かっている、そのようなシンボルの構築に自ら協力したふしもあります。しかしそれでも、人びとがバスのなかでのたった一度の反抗的行為に彼女の長い経歴を矮小化しようとするには、当惑を感じていました。シオハリスによると、彼女は、それを、「彼女のラディカリズムから合法性を奪い、そうすることで、公民権運動自体からラディカルさを奪う戦略の一環」だと考えていたのです。

彼女は、歴史のなかにつま先立ちで忍び込んだ裁縫職人ではなく、信念と目的意識、誇りを持ち、歴史のなかを闊歩した女性だったのです。すべての人びとにとって住みよい世界を創造しようとするコミュニティの運動に、疲れも知らず70年間以上も身を捧げた女性だったのです。私たちが称え、尊ばねばならないのは、そして理解しようと努めねばならないのは、このようなローザ・パークスの姿なのです。彼女は、彼女が生きた時代にあつて最も切迫した問題に献身的に行動したアクティヴな市民^{シテイズン}でした。それがわかれば、彼女と同じことをするには、どのように行動すれば良いかもわかると思います。